



Title	元弘相傳本『五行大義』引『説文解字』考 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	路, 勝楠
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15982号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92261
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Shengnan_Lu_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 路 勝 楠

主査 教授 近藤 浩之
審査委員 副査 教授 弐 和順
副査 准教授 蔦 清行

学位論文題名

元弘相傳本『五行大義』引『説文解字』考

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文では提出後すぐに、題名を簡潔なものに改めること、文章における若干の補足を行うことを指示し、その修正を含めて審査を行っている。

本論文では、（五帖よりなる折本である）元弘相傳本『五行大義』のおもての本文およびうらの背記における『説文』引用の全体像を明らかにして、本文には『説文』関連記述の中に『淮南子』許慎注などの佚文が存在する可能性を指摘し、背記には『太平御覽』が盛んに引用されていた状況を示唆する例が多数あることを明確にしている。とりわけ以下の四点を、ユニークな観点と方法によるものとして高く評価できる。

①『五行大義』の研究において、『説文』の引用のされ方、関連する引用文と出典とを詳細に分析することによって、元弘相傳本の本文および背記における文献引用の重要な問題点を浮き彫りにしている。『説文』という視点から『五行大義』の構造や成り立ちを論じるという手法によって、『五行大義』研究の新しい局面を切り拓いたこと。

②『五行大義』本文において『説文』の引用とは考え難い（出典不明の）四例を特定し、これらの四例が許慎『五經異義』または『淮南子』許慎注にかかる引用である可能性を指摘し、さらに他の一例「説文曰、地反物爲秋」についても、実は失われた『淮南子』許慎注であった可能性を考察することによって、『五行大義』における『淮南子』許慎注の利用という新たな研究課題を提示できたこと。

③元弘相傳本『五行大義』巻一の「地反物爲秋」は、おもての本文とうらの背記両方にかかわる重要な問題点を浮き彫りにする手がかりであることを発見し、『五行大義』・『玉燭寶典』の「説文曰、地反物爲秋」、『太平御覽』・『五行大義』刊本の「説文曰、天地反物爲秋」という、これまで『説文』に由来する引用だと認識されていたものが、実はなんらかの原因で誤った引用が『五行大義』の本文に反映され、後の『御覽』に影響を与え、さらには次の刊本に誤りを惹起し、そしてついには刊本の誤りが正しいものだと思われたまま定着してしまった、ということを明らかにしたこと。（また、その原因として、『淮南子』時則訓の「禘（妖）」にかかる失われた許慎注の可能性も補足したこと。）

④元弘相傳本『五行大義』の背記において『説文』関連の記述全八十一例について詳細に検討し、『東宮切韻』からの孫引き以外は、わずかな例外（一例）を除いて全てが『太平御覽』からの孫引きであることを明らかにし、当時（鎌倉末期から室町前半期）の日本で

『太平御覽』が盛んに利用されていた状況を傍證する一端を明示したこと。

なお、第二章は「元弘相傳本『五行大義』本文所引『説文解字』考」と題して『中國哲學』第 51 號（北海道大學中國哲學會、2024 年）に掲載予定である。

第三章は「『説文曰、地反物爲秋』をめぐる誤解」と題して『中國哲學』第 49 號（2022 年）に、第四章第一、二節は「元弘相傳本『五行大義』背記所引『説文』考」と題して『中國哲學』第 50 號（2023 年）に、また、附論は「『説文解字』敍文の「諷籀書九千字」に對する考察一段注を中心に」と題して『研究論集』第 22 號（北海道大學大学院文學院、2023 年）に掲載済みである。附論以外は、いずれの論考も査讀を経たものであり、すでに學界において一定の評価を得ている。

さらに附言すれば、第二章の補説は、より詳細な分析と論證を加えて改めて「『五行大義』における「地反物爲秋」の再検討」と題して『日本中國學會報』に投稿し、現在査讀中である。『淮南子』時則訓の「𦉰（妖）」にかかる失われた許慎注の可能性を論じ、『淮南子』許慎注と高誘注の研究状況に一石を投じようとしている。

・學位授與に関する委員會の所見

審査の過程において、元弘相傳本『五行大義』の書誌學的な情報の整理と考究がやや不足していること、本文と背記とでは引用された『説文』の學術的意義が根本的に異なること、その相違（中國文獻學なのか日本漢籍受容史なのか）をもっと意識的に分けて論述すべきこと、元弘相傳本という特殊な様式（背記の存在、ヲコト點など）がもたらす影響への配慮が十分でない等の指摘がなされた。しかし、これらは、本論文の目的と方法、明らかにした成果を本質的に變更するものではなく、むしろ今後の研究の進展の中でこれらの課題を克服することが十分に期待できることから、本論文の意義を損なうものではない。

以上に基づき本審査委員會は、本論文に示された申請者の研究成果を高く評價し、全員一致で本論文が博士（文學）の學位を授與するにふさわしいものであるとの結論に達した。